

インド仏教における五種姓説の成立と展開 — 瑜伽行派の經典註釈書をもとに —

岡田英作

京都大学大学院文学研究科 博士課程

(現 京都大学大学院文学研究科 非常勤講師/
高野山大学密教文化研究所 受託研究員)

緒言

インド仏教の中で、大乘仏教の二大学派の一翼を担う瑜伽行派(Yogācāra)は、初期瑜伽行派の根本典籍『瑜伽師地論』(Yogācārabhūmi, 4世紀頃)を端緒として、菩提の獲得や般涅槃への到達といった、いわゆるさとの可能性に関して、独自の種姓(gotra)説を展開する。

『瑜伽師地論』では、種姓について、そのような可能性を保証する因子として衆生の有する資質と規定し、種姓の有無に基づく般涅槃への到達可能性の決定や、種姓の種別に応じた声聞・独覚・菩薩という三乗説を主軸に種姓説を立てる。さらに、同論に続く初期瑜伽行派文献『大乘莊嚴經論頌』(Mahāyānasūtrālamkāra-kārikā, 4世紀頃)では、『法華経』(Saddharmaṣuṇḍarika-sūtra)に代表される一乗説の影響から、種姓の確定・未確定という区別を設け、一乗説は種姓が未確定の声聞を大乘に誘引し、未確定の菩薩を慰留するための手立てであるという理論を構築する。以上の瑜伽行派における種姓説の中で注目すべきは、永続的であれ一時的であれ、無種姓の者は般涅槃へ到達し得ないこと、すなわち、救済され得ないことを認める点である。

玄奘(602~664)を初祖とする法相宗は、瑜伽行派の種姓説から、声聞・独覚・菩薩という三乗の種姓、確定されていない種姓、般涅槃へ到達し得ない無種姓、という五種姓を抽出して並べ、いわゆる「五姓各別」説を確立した。「五姓各別」説に関する従来の研究は、主に中国や日本撰述文献に基づき、論じられることが多く、枚挙に暇がない。そのなかにあって、佐久間[2007]¹⁾は、「五姓各別」説のインドにおける源流を辿るために、中国撰述文献である遁倫(7世紀頃)集撰『瑜伽論記』を手掛かりとして、数多くのインド仏教文献を参照している。そして、「五姓各別」説が玄奘の手によるものであり、インドの瑜伽行派の間には「五姓各別」説は存在し

なかったか、あるいは、ヴァラビーのステイラマティ(6世紀頃)に帰せられている『大乘莊嚴經論』(ヴァスバンドゥによる註釈を含む)に対する註釈書に5つの種姓の構成が認められたとしても、注目を集めるものではなかったと結論付ける。しかし、同研究では、チベット語訳のみ現存するインド仏教文献に関して、『仏地経』(Buddhabhūmi-sūtra)や『大乘莊嚴經論』に対する註釈文献を除いて調査の対象に入っておらず、瑜伽行派における五種姓説の成立と展開について、この点に検討の余地が残る。

考察方法

インド仏教における五種姓説の成立と展開をめぐり、まず、本研究の関連資料として、佐久間氏の研究が調査対象とする諸文献、『瑜伽師地論』『大乘莊嚴經論』『楞伽経』(Laṅkāvatāra-sūtra, 5世紀頃)親光等造『仏地経論』(6~7世紀頃)における五種姓説に関連する教説を検討する。その際、各文献のサンスクリット、チベット語訳、漢訳を対照させた資料集とその和訳を作成して、従来見出されてきた五種姓説の文脈を確認する。

次に、本研究の基礎資料として、従来注目されてこなかったチベット語訳のみ現存する瑜伽行派の經典註釈書、アサンガ(ca. 330~405)著『仏随念註』(Buddhānusmṛti-vṛtti)²⁾、ヴァスバンドゥ(ca. 350~430)著『仏随念広註』(Buddhānusmṛti-tīkā)³⁾、著者不明(少なくともステイラマティ以降)の『聖無尽意経註』(Āryākṣayamatīnirdeśa-tīkā)⁴⁾における五種姓説に関連する教説を検討する。その際、チベット語訳テキストを校訂し、註釈対象である經典自体の文脈を確認しながら、読解を進める。なお、種姓説に関して、瑜伽行派の諸文献における用例を検討した研究成果がすでに多く公表されているため、これらを適宜参照する。さらに、

基礎資料に散見される種姓に関する教説を回収し整理することで、五種姓説に関連する教説の読解に役立てる。

以上の文献における五種姓説に関連する記述に考察を加えることで、瑜伽行派における五種姓説の成立と展開の問題を(1)五種姓の併記の有無および(2)無種姓に関する解釈という2点から検討する。

結果および考察

瑜伽行派における五種姓説の成立と展開に関して、新たにチベット語訳のみ現存する瑜伽行派の經典註釈書を加え、五種姓説に関連する記述を検討した。その結果として、(1)五種姓の併記の有無の観点から、まず、瑜伽行派における五種姓説の成立に関しては、教化対象に関する文脈の中で、アサンガ著『仏随念註』が無種姓を除く4種の種姓を数えるのに対して、ヴァスバンドゥ著『仏随念広註』がアサンガの註釈とほぼ共通した解説を加えているにも関わらず、無種姓を加えて五種姓を数えていることを確認した。したがって、瑜伽行派における五種姓説の始源は、アサンガからヴァスバンドゥへの系譜の中で、ヴァスバンドゥによる教化対象に関する文脈に求められる。これにより、従来五種姓説が見出されてきたステイラマティに帰せられている『大乘莊嚴經論』に対する註釈書から、年代が引き上げられる。次に、瑜伽行派における五種姓説の展開に関しては、従来の研究が指摘するようにステイラマティに帰せられている註釈書の中に五種姓説を見出すことができるが、ステイラマティ以降の成立と考えられる『聖無尽意經註』の「確定(*niyata)と不確定(*aniyata)」という経文に対する註釈において、五種姓説に関連する解説を見出した。したがって、瑜伽行派において五種姓説がヴァスバンドゥやステイラマティ以降も展開したことが明らかとなった。

さらに、(2)無種姓に関する解釈の観点から、五種姓を併記する文献の中で、『仏地經論』『仏随念広註』『聖無尽意經註』における五種姓説は、無種姓の者を善趣に導くという点が共通することを確認した。善趣に導くという行為に関しては、瑜伽行派において、教化対象から外れた救済可能性のない者を対象としていると、本研究課題に先行して拙稿⁵⁾ですでに指摘した。この理解を踏まえるならば、『仏随念広註』や『聖無尽意經註』における五種姓説は、菩提の獲得や般涅槃への到達といった救済可能性のない無種姓を含み、この点において、「五姓各別」説と共通性を有していることが判明した。

要約

インド仏教における五種姓説の成立と展開をめぐる、本研究では、佐久間氏による五種姓説に関する研究を踏まえ、従来注目されてこなかったチベット語訳のみ現存する瑜伽行派の經典註釈書、アサンガ著『仏随念註』、ヴァスバンドゥ著『仏随念広註』、著者不明(少なくともステイラマティ以降)の『聖無尽意經註』に着目した。以上の文献における五種姓説に関連する記述を抽出し、考察を加えることで、瑜伽行派における五種姓説の成立と展開の問題に関して、(1)五種姓の併記の有無および(2)無種姓に関する解釈という2点から検討を行った。

その結果として、(1)五種姓の併記の有無の観点から、五種姓説の始源は、アサンガからヴァスバンドゥへの系譜の中で、ヴァスバンドゥ著『仏随念広註』の教化対象に関する文脈に求められること、そして、ステイラマティ以降の成立と考えられる『聖無尽意經註』に五種姓説に関連する解説が見出され、瑜伽行派において五種姓説がヴァスバンドゥやステイラマティ以降も展開したことを明らかにした。さらに、(2)無種姓に関する解釈の観点から、以上の文献における五種姓説は、救済可能性のない無種姓を説く点で、「五姓各別」説と共通性を有していることが判明した。

本研究成果の一部は、2015年7月開催の密教研究会学術大会(於 高野山大学)、9月開催の日本印度学仏教学会学術大会(於 高野山大学)において口頭発表し、各学会の学術雑誌『密教文化』『印度學佛教學研究』において発表された。

謝辞

本研究を遂行するにあたり、公益財団法人三島海雲記念財団より平成27年度学術研究奨励金を賜りました。公益財団法人三島海雲記念財団ならびに関係者の皆様に心より感謝申し上げます。

文献

- 1) 佐久間秀範：加藤精一博士古稀記念論文集 真言密教と日本文化，下，pp. 265-305, 2007.
- 2) *Buddhānusmṛti-vṛtti* of Asaṅga, (Tib.) D (3982) ngi 11b5-15a6, P [104] (5482) ngi 14a1-18b1.
- 3) *Buddhānusmṛti-ṭikā* of Vasubandhu, (Tib.) D (3987) ngi 55b3-63b5, P [104] (5487) ngi 69a6-79b8.
- 4) *Āryākṣayamatīnirdeśa-ṭikā*, (Tib.) D (3994) ci 1a1-269a7, P [104] (5495) ci 1a1-343a7.
- 5) 岡田英作：密教文化，229, pp. 58-36, 2012; 高野山大学密教文化研究所紀要，27, pp. 120-105, 2014.